

聖書：ローマ 12：2

説教題：心の更新

日時：2016年4月10日（朝拝）

1～11章にかけて「教理」について語って来たパウロは、12章から「実践」について語り始めています。彼は12章1節で、これまで見て来た神のあわれみに感謝して、あなたがたのからだを神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい、それこそあなたがたの霊的な礼拝ですと言いました。私たちは今ここに集まって礼拝をささげていますが、礼拝とはこの時間のことだけではなく、私たちの全生活がそうであるということでした。私たちはこの聖日礼拝によって養われ強められつつ、これから出て行くところで私たちのからだをささげる生活をするのが真の礼拝だと言われました。

さて1節ではこのように、私たちの「からだ」が強調されましたが、それはもちろん私たちの「心」と関係します。そのことが2節で語られます。私たちのからだを通して表される神への礼拝生活のカギとなるのが、この2節で言われている「心」に関することなのです。ここに二つの命令が語られています。

まずパウロが言っていることは「この世と調子を合わせてはいけません」ということです。「この世」とは何でしょうか。ここで使われている言葉は直訳では「この時代」です。「この時代」は「次に来る時代」すなわち永遠の世との対比で使われています。ですからこれはやがて過ぎ去る世ということです。Iヨハネ2章17節では「世と世の欲は滅び去ります」と言われています。なぜこの世は過ぎ去るのでしょうか。それはこの世は永遠の御国とは相いれないからです。この世界は最初、素晴らしく造られましたが、人間が罪を犯した結果、神に逆らう世となりました。神を認めず、神に反抗する世となりました。そのようなこの世は必ずさばかれなければなりません。しかし神は人々を救うため、最後のさばきの日まではこの世を滅ぼさないのでおられます。そういう意味でこの時代、この世はやがて過ぎ去る、一時的な世なのです。そういう「この世」に同調してはならないと言われているのです。

この世は様々な特徴を持っています。その一つは人間中心の考え方です。世界の中心から神を追い出して成り立たせようとする世界観ですから、その中心には人間が来ます。最初の人間アダムとエバも自分たちが神の立場に上ろうとして墮落しま

した。その子孫である人間が集まっているこの世も、自分自身を、人間を高い所に置こうとします。人間を中心とし、人間を持ち上げ、人間の必要や人間の欲望が最優先されます。神とその御言葉は後回し。困った時だけ、神様、神様と名を呼ぶ。

またこの世は物質主義という特徴を持ちます。目に見えない神を否定し、目に見える物こそを確かであるとし、そのため立派なものを持つこと、多くの財産を手にする、外側を美しく飾って見せることなどを特に高く評価します。

またこの世は刹那主義となります。やがて来る世よりも、今ここでの生活が大事であると考えます。死んだらどうなるかは分からないから、今ここで楽しむことを第一に考える。永遠の将来に向かって耐え忍ぶ生活をするなどということはやっていけない。とにかく今楽しいということがすべてに優先します。

そしてこの世は神を否定し、人間を中心とする結果、不道徳な世となります。ガラテヤ書1章4節に「今の悪の世界」と言われています。神の戒めを無視し、罪を持つ人間がやりたいことを許容するなら、それは不道徳な世界、むしろそれをお互いに奨励し合う世界となります。

この世はこのような世界観を持って私たちに、「あなたも我々と同調するように、我々と一緒に歩むように」と様々な形でプレッシャーをかけて来ます。テレビのコマーシャル一つを取ってみてもそうです。これを手に入れてあなたの欲望を満たさない！他の人に後れを取らないように、この時代の流行に乗り遅れないように！と。道徳的な勧めよりも、私たちの「欲」に訴えかけて来ます。そういう「この世」に調子を合わせたら、私たちは自分のからだを神に受け入れられる供え物としてさげることなど不可能になります。むしろこの世の汚れにまみれ、毒されて、とてもその生活をもって神を礼拝することなどできません。

そうならないために私たちに必要なことは自分のアイデンティティーをしっかりと持つことではないでしょうか。私たちは聖書の中で天国の市民であると言われて、死んでから天国の市民になるのではなく、今すでに天国の市民であると言われて、彼らもこの世のものではありません。」と言われました。私たちはそういう自分であることを忘れて、この世の人のように歩むべきでしょうか。1コリント

15章に「友だちが悪ければ、良い習慣が損なわれます。」とあります。もちろん私たちがこの世の人と一緒に生活して、その人々に影響を与えるのなら良いのですが、逆に私たちがこの世と調子を合わせるなら、それが意味することは、私たち自身がだんだんこの世に似て行くということです。天国人なのにこの世の人ようになって行く。何と恐ろしいことでしょう！国籍が天にある私たちは、この世では外国生活しているような者であると言われていました。私たちは自分の故郷の誇りを失わずに歩みたいと思います。やがては過ぎ去る国と調子を合わせ、それに似る人となって行ってはならないのです。

ではどうしたら良いのでしょうか。私たちはただ「世と調子を合わせないように」と歩むだけではなく、より積極的なことにも取り組む必要があります。それが二つ目の命令です。すなわち「心の一新によって、自分を変えなさい」ということです。ここで新改訳は「自分を変えなさい」と訳していますが、原文は受身形になっていますから、正確に訳せば「変えられなさい」となります（新共同訳：「自分を変えていただきなさい」）。またこれは現在形で語られていて継続のニュアンスが込められていますから、その意味は「変えられ続けなさい」になります。つまりここで命じられているのは、日々変えられ続けるという継続的な聖化の歩みなのです。

これはどのようにしたら私たちに起こるのでしょうか。それは「心の一新によって」と言われています。「一新」と訳すと、何か一回限りの特別な決心、特別な変化のことを言っているように思えますが、これと同じ言葉は聖書では他に1回、テトス書3章5節に出て来ます。そこでは「聖霊による新生と更新の洗いをもって、私たちを救ってくださいました」という文章の中で「更新」と訳されています。この心の更新による変化はどうしたら私たちに生じるのでしょうか。パウロはここでそのことをはっきり文字としては述べていませんが、聖書の他の箇所から分かることは、それは「聖霊によって」ということでしょう。私たちは自分を変えなさい！と言われても、変えられない者たちです。「心の一新によって」と言われても、そんな大それたことなどできそうにない者たちです。しかしこれは聖霊が私たちにしてくださいるわざなのです。ですから「変えられなさい」「変えていただきなさい」と受身形で語られているのです。この「変えられる」という言葉は、パウロの手紙では他にⅡコリント3章18節にだけ出て来ますが、その御言葉は今日の箇所の良い注解となっています。Ⅱコリント3章18節：「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたち

に姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」

さてここで興味深いのは「変えられなさい」という言葉が受身形で語られている一方、これが命令形で語られていることです。受け身なのに命令されている。これはとても大事な真理を私たちに示しています。それはこれが受身形であることは、これが神のわざであることを示す一方で、これが命令形であることは、ここに私たちのすべきことがあるということです。聖化は御霊なる神のわざですが、そこには私たちのすることもあるのです。まさにその神秘が、この不思議な言い方に端的に示されているのです。では変えられ続けよ！とされている私たちはどうしたら良いのでしょうか。

ある本に書いてあったたとえですが、少年野球の子どもを応援する際、親はバッターボックスに立つ子どもに「かっとなせ！」と言い、守備につく子どもには「しっかり守れ！」と応援します。決して受身形では命令しません。「打たせてもらいなさい」とか「守らせてもらえ！」とは言いません。しかし子どもが家に帰って来た時、お母さんが「シャワーを浴びてきれいになって来なさい」と言う時はどうでしょうか。その子どもには自分のからだをきれいにする力はありません。彼をきれいにするのはシャンプーの力であり、水の力です。ですから彼はシャンプーと水によってきれいにされるのです。これは受身です。彼は「洗われる」のです。しかしだからと言って私にすることは何もないと言って、その子どもは何もしないのではありません。彼自身がシャワーの下に行かなくてはなりません。

私たちも同じです。私たちを造り変えてくださるのは聖霊です。しかしその働きにあずかるには、子どもがシャンプーと水の下に自分を置くように、私たちも日々私たちを造り変える聖霊の働きの下に自分を置かなくてはなりません。それは具体的にどうすることでしょうか。それは何よりも聖霊が用いる第一の手段である御言葉の下に自分を置くことです。御言葉は聖霊が書いたものであり、聖霊は御言葉を用いてご自身の働きをします。ですから私たちが聖書を開く時、それはただ聖書という本を読んでいるのではなく、私たちの心を新たにする聖霊のシャワーの下に自らを置いていることなのです。

ですから私たちは自分をどんなシャワーの下に置くかについて良く考えなければなりません。簡単に言えば、世のシャワーの下に自分を置くのか、それとも御言

葉のシャワーの下に自分を置くのか。もし一週間、この世のシャワーを浴びまくり、日曜日の一時間だけ聖書のシャワーの下に自分を置いても、それではどちらからより多くの影響を受けることになるかは明らかです。そのままではやがては過ぎ去るこの世の影響を強く受けることは避けられません。そうならないために私たちはより積極的に御言葉の影響の下に、また御言葉を用いて働く聖霊の力の下に自らを置くようにしなくてはなりません。そうしてこそ、私たちは自分の心が新たに更新され、日々変えられて続ける歩みに向かうことができるのです。

最後に見たいのは、この取り組みをする人に与えられる祝福についてです。世と調子を合わせず、御言葉と聖霊によってその心を変えられ続ける人が受ける祝福は何でしょうか。それは「神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知る」という祝福です。私たちは日々の歩みの中で、様々な問題をどう考え、対処したら良いか、分からない時が多くあります。どうすることが神の御心にかなうことか、分からない。急いで聖書を開いてもマニュアルのように事細かに私たちの知りたいこと全部が書いてあるわけではありません。しかし心の変革され、変えられ続けるプロセスを歩んで行くと、様々な状況でどう歩むことが神の御心なのか、何が神に喜ばれ、祝福される道なのか分かるようになる！私たちは人生の問題にぶつかった時、信仰の先輩に相談します。すると色々なアドバイスをいただいて助けられることがあります。それは、その信仰の先輩たちはある意味で神の御心が分かっているということです。聖化の道を先に進んでいる人として、やはり私よりもそれが見えている。もちろんそのようにして尊敬する信仰者に聞くことも大事です。しかしもし自分でそのことが分かり、確信を持てたら、どんなに素晴らしいことでしょうか。それはここで言われているように私自身を変えられる聖化の歩みとセットで与えられる祝福なのです。聖化されて行くとは、そういうことなのです。そして天国に行った時には最終的な形でそうなると言われていました。たとえばエレミヤ書には「人々はもはや、主を知れ、と言って、おのおの互いに教えない。それは、彼らがみな、身分の低い者から高い者まで、わたしを知るからだ。」とあります。またイザヤ書にも「主を知ることが、海をおおう水のように、地を満たすからである。」とあります。私たちは聖化されて行けば行くほど、ごく自然なこととして、ほとんど直感的に神の御心を判別できるようになるのです。そうしてこそ、私たちは自分の体を正しく神にささげる生活ができるのです。

私たちはどんな影響の下に自分を置いて歩む者でしょうか。世に調子を合わせる者でしょうか。それとも御言葉を通して御業をなされる聖霊の働きの下に自らを置く者でしょうか。パウロはこの後 13 章 12 節で「夜はふけて、昼が近づきました。」と言います。この世とこの世の有様は間もなく過ぎ去ろうとしています。この世の暗さはさばかれて、昼が来ようとしています。夜明けはそこまで来ているのです！そんな状況で果たして私たちはこの世と調子を合わせた生活をしている場合でしょうか？そうではなく、私たちは御言葉のシャワーの下に自らを置いて、聖霊によって、自分の心が変えられ続ける歩みに進みたいと思います。やがては過ぎ去るこの世と一緒にあって、目的を見失った歩みをするのではなく、来たるべき栄光の御国を見つめて、日々自分の心が更新され、神の御心を喜びをもって益々わきまえ知る者となり、具体的なからだの用い方に表される神への礼拝生活をささげて、憐れみ深い神に応答する祝福の歩みへ進みたいと思います。